

## 手書き 第1問

ここまででは人形劇の歴史を話してきましたが、次からは子供が人形劇と出会う意味を子供の発達に沿って考えていきます。まずは0歳から6歳。乳幼児期から幼児期の子供たちです。この時期の子供たちは人への信頼感を育て、感性を豊かにしていく人間の土台を作っていく大事な時期です。

0から3歳の乳幼児期の子供の発達の特徴に、アニミズムと自己中心性があります。アニミズム。なかなか聞かない言葉ですね。アニミズムと言いますが、すべてのものが自分と同じように生きていると思っている状態です。アニミズム期の子供たちが人形劇を見る時、人形は自分と同じように生きていると言う感覚で見えています。皆さんも小さな子供の頃、人形は生きていて夜になると動き出すと思っていた人はいませんか。私も結構長くそう思っていました。夜、電気をパチっとなげると人形があつという間に元の場所に戻る。なんか毎日ドキドキして暮らしていたアニミズム期を楽しんでいた子供だったんでしょね。

もう一つの発達の特徴である自己中心性ですが、ここで言う自己中心性はわがまま自己中という意味ではありません。自分を基準に物事を考えていく状態です。自分が痛いと思えば相手も痛いと思ひ、嬉しいと思えば相手も嬉しいと思うなど、自分と同様に感じていると思うのです。例えば子供がおもちゃを投げて「そんなことをしたら痛い痛いって言うよ」と言うと、子供はおもちゃが自分と同じ感情があると思ひ、今度は自分がされたように「痛いねー」と優しく撫でたりします。この乳幼児期に人形劇と出会うことは、物語のストーリーは理解できなくても人形を生きていて感じ、登場人物の嬉しい楽しい気持ち、寂しい悲しいといった感情を自分のこととして受け止める体験となっていく。それは子供の感情を豊かに引き出す体験になるのではないかと考えます。

4歳から6歳の幼児期になると言語での表現が活発になり、親子や友達との言葉によるやりとりも豊かになりますね。5、6歳になると、できる・できない、大きい・小さいという2極の考えから、昨日・今日・明日、大・中・小といった系統的な事象もわかるようになり、物語を理解する力がつきます。人形劇は登場人物が造形的にわかりやすく作られており、物語を理解する上での助けとなります。例えば、怖い狼、弱いうさぎ、優しいおじいさん、意地悪なおばあさんなど、それによって物語にスムーズに入ることができるのです。物語が展開していく様子に、想像力が刺激されワクワクドキドキしながら楽しむ幅も広がるでしょう。その楽しいと言う気持ちを誰かと共有しようというのが幼児期の特徴です。狼に追いかけているうさぎを見て、頑張れと声援を送る子供たち。見ている人同士で心の動きを共有する体験は、人への関心や信頼感、共感する力を育む土台になっていくと考えます。